

36. 名張にも戦争があった

1945（昭和20）年8月15日、日本がポツダム宣言を受諾し第2次世界大戦が終結しました。当時、日本は大規模な空襲や広島、長崎への原爆投下によって大きな都市は焼け野原の状態でした。名張は、山間の小さな町でしたから大規模な空襲などの被害にはあいませんでしたが、悲惨な戦争の爪痕は残されています。そして、名張から多くの若者が兵士として戦場にかり出され、命を落としふるさとへ帰ることができませんでした。

1. B-29の墜落

B-29は、第2次世界大戦でアメリカがつくった全長30.2m、全幅43.1mの大型爆撃機で、日本各地の空襲や広島・長崎の原爆投下の攻撃に使われた飛行機です。

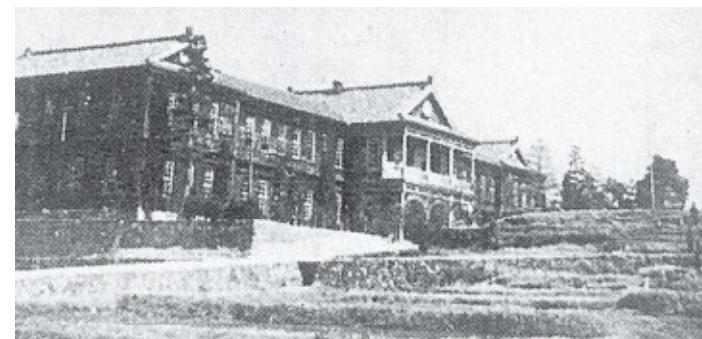
映画にもなった「火垂るの墓」で描かれている神戸大空襲の攻撃に参加し、基地に帰る途中の1機が1945（昭和20）年6月5日、日本軍の戦闘機の攻撃を受け炎上し、名張の上空を旋回しながら青蓮寺の山奥に墜落しました。11名の搭乗員は、1名が機と運命を共にし、1名は墜落死、9名がパラシュートで降りてきましたが、三重県側に6名、奈良県側に3名が捕虜として捕まえられました。捕えられた搭乗員は、軍事裁判にかけられ神戸無差別爆撃の罪により処刑、もしくは収容所で病死など、全員が本国アメリカへ帰ることができませんでした。

2. 蔽持小学校への銃撃～被弾ピアノ～

B-29墜落から4日後、アメリカ軍の航空母艦から飛び立った戦闘機グラマンがB-29を探すために名張の上空に飛来しました。学校の大きな校舎は、上空から見ると普通の民家と違い工場にも見えます。蔽持国民学校（現蔽持小学校）も空襲を避けるため、校舎の壁を黒く塗るなどの対策が取られていたが、アメリカ軍の戦闘機の攻撃の的になってしまいました。その時に講堂に置かれていたピアノも被弾しました。ピアノの後ろから右横へ弾丸が貫いた跡が70年以上たった今でも生き生きと残っています。このピアノは「被弾ピアノ」として現在、蔽持町里にある武道交流館いきいきのロビーに展示され、今も戦争の悲惨さや平和の大切さを静かに私たちへ伝えています。



B-29 機体破片



壁を黒く塗られた当時の蔽持小学校

ています。今では、鳴らない音や調律が合わない音もありますが、市内のグループがこのピアノで演奏された音を録音し、それが、市内の中学校での非核平和コンサート等に使われています。

3. 下比奈知、新田への焼夷弾

当時、日本の住宅は木造で茅葺き屋根の家が多く、火災が起きると次々と周りの家に燃え移り、大きな火災となりました。そのような日本の住宅事情をアメリカ軍はよく知っており、日本を空襲する際には爆弾だけではなく、焼夷弾と呼ばれる兵器を爆撃機から投下しました。焼夷弾とは、上空からの落下の勢いで建物の屋根を突き破り炎を上げる兵器でした。この焼夷弾がアメリカ軍の爆撃機により1945（昭和20）年6月13日に下比奈知に投下され、民家が全焼しました。2日後の6月15日には、美旗の新田に投下されました。新田は、初瀬街道に沿って家が並ぶ宿場町の家並みでした。やがて焼夷弾による火災が発生し、民家15戸をはじめ、合計56棟が全焼する被害がありました。

4. 近鉄赤目口駅への銃撃

1945（昭和20）年7月24日早朝、赤目口駅前には戦場へ向かう兵士を見送りに多くの人が集まっていました。また、近くの滝川国民学校（現錦生赤目小学校）の児童もたくさん見送りに来ていました。やがて兵士が乗り込む列車が駅に到着する時、上空からアメリカ軍の戦闘機が、列車や駅前に集まっていた群衆にめがけて、機銃掃射を浴びせかけました。戦闘機の射撃は、そもそも敵の飛行機を攻撃するものなので、人間が撃たれればひとまりもありません。駅前は、一瞬で血の海となりました。死亡者の数は記録によって違いますが、100名以上の死傷者が出て、その中には小学校の児童も多数含まれていました。赤目地区では、戦場で亡くなった地元の兵士と共に、この駅前での機銃掃射で亡くなった人たちも、小学校近くの忠魂碑にお祀りし、毎年、供養を行っています。

 終戦間近の8月8日に
は30名以上の死傷者が出
たといわれている美旗駅へ
の銃撃もありました。



被弾ピアノ



14cmのペンと並ぶ焼夷弾



丈六寺にある赤目口駅銃撃時の犠牲者の慰靈碑

初瀬街道 【→P46】

5. 戦時中の暮らし

戦争末期、戦況が激化してくる中、物資が不足しました。少しでも食料をと、学校の運動場は畠になり、サツマイモ等が植えられ、学校では児童が勉強よりも畠の世話をしていました。また、油も不足していたので、山へ松ヤニ（油）を取りに出かけていました。

都市部では、空襲による被害が大きくなり兵器を作る軍事工場がこの名張にも疎開をしてきました。潜水艦などのメーターを作る工場が1944（昭和19）年に現在の名張市役所近くに移ってきました。働き盛りの男性の多くは、兵士として戦場にかり出されたため、名張高等女学校（現在の名張高等学校）の生徒たちが毎日工場で働いていました。当時は、児童や生徒までもが「お国のため」と言って働き、ゆっくりと勉強ができない時代だったのです。

6. 忠魂碑

市内各所には、忠魂と刻まれた大きな石碑が建てられています。ここには、明治以降、戦死した地元出身の兵士や、一部の地域では空襲で亡くなつた人が祀られています。そして、毎年、地区の人たちと亡くなつた人の遺族が、春と秋に慰靈祭を行っています。また、名張市でも秋に戦没者追悼式がおこなわれ、不戦の誓いと亡くなつた人たちの冥福を祈っています。

戦後70年以上が経ち、戦争を実際に体験した人たちの声を聞くことは、年々難しくなってきています。しかし、戦争の悲惨さや苦しみを次の世代に伝えようと本を作ったり、戦場で亡くなつた兵士の遺族が手記を作ったりと、戦争体験の話はいろいろな形で残されています。それらに学び、戦争を繰り返すことなく、平和な世の中をつくっていくことが大切です。



市戦没者追悼式



軍事訓練で名張川を渡る戦車



戦争関連書籍

蔵持小学校への銃撃

当時の蔵持国民学校の手記

昭和20年6月9日午後のことでした。空襲警報が発令されたので、私は急ぎシャックリ川の堤防に避難するように命じ、校庭の北側から生徒の状況を監視していました。まもなく敵機が数機北の空から学校の方に飛んできました。これは一大事と校庭に掘りかけてあった防空壕に飛び込んだ瞬間、耳をつんざ

くようなすさまじい音を立て校舎は射撃されました。敵が去るのを待って、すぐにシャックリ川にかけつけましたところ、一人のけが人いませんでした。その時のうれしかったことは、終生忘れません。ふと後ろを振り向いて学校を見ると、階上の窓からむくむくと煙が出ています。一目散に学校に戻り調べてみると、弾丸にあたって壁がみじんに壊れ、土煙が一面にたちこめっていましたが、火災の心配はありません。よかったですと胸をなでおろしました。よく見ると弾丸は直径40センチもある柱を貫き、さらに廊下の大きな柱も撃ち抜かれています。また、階段にあった弾丸は硬い石をこわして、大きな破片がころがっていました。いまさらながら弾丸の威力におどろきました。その他80発以上も校舎に命中していました。

『蔵持小学校百年史』『名張にも戦争があった』（そみの会発行 1993年）より一部抜粋



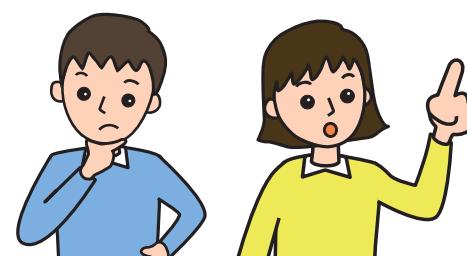
名張地区忠魂碑



青蓮寺地蔵院の平和の集い（8月15日）



平和学習



世界中の人たちが平和に暮らせる世界をつくるには、私たちは何をすべきなのか考えてみましょう。